

# 『海遊記』 I

訳・廣 田 律 子

中国浙江省の麗水を中心に伝承されている鼓詞は陳夫人への願かけや願もどし  
の場で説唱され、陳夫人（陳靖姑・陳十四）という女神への信仰を背景に出来上  
がった芸能である。人々の信仰と祭祀の場で唱われ、芸人によって口頭で伝承さ  
れている鼓詞が文人によって文学化され世に出回った小説に『海遊記』がある。乾  
隆十八年（一七五三年）に文天堂で刊行されたものが、近年葉明生によって発見  
され、民俗曲芸叢書（施合鄭民俗文化基金2000年）の中に『海遊記』として紹介  
されている。今回この『海遊記』の翻訳をこころみる。なお頁数は翻訳部分の頁  
を示す。

## 海 遊 記 卷上

### （一）張世魁夫婦は災難に遭う（pp. 60-62）

天地開闢以来、人々はその仕事に安じ、儒釈、道、巫の四つの教えは天下に伝  
わって来た。儒は孔聖人より出て、俗世において、孝悌忠信を以て教えるを行う。  
釈は世尊より出て、西方において、精進を以て教えるを行う。道は老子より出て、  
鐘南において、修練を以て教えるを行う。巫は九郎より出て、閩山において教える  
を行う。

唐代の敬宗元年に至って、三十三天の玉帝は下界の諸神を召して大会を開いた。  
観音大士は大会に赴いてから、南海に帰って、雲の上で閩山の法門が長く沈んで  
現れないのを法眼で見かけたので、その教えを宣揚しようと思った。しばらく考  
えると、手を伸ばして頭上から一本の髪の毛をぬいて、海中に投げ捨てた。それ  
が長さ三丈の一匹の大きな白い蛇に化けて、海中で遊ぶ。さらに、自ら切り落と  
した爪を人間に変じさせる。一筋の金色の光が、善人の家に誕生して、後に閩山  
に入って法を学んでから、蛇母退治を以て巫の教えの法門を広めるように言いつ  
けられた。その金色の光は遂に飄々と福州羅源县下渡村陳諫議の家に入って人が  
誕生する。観音大士が南海にお帰りになった事はさておき。話をもう一方に分け

よう。

さて、青州府では元から一匹の烏虎の精がその地方を害していた。後に、烏虎の夢知らせによって、一つの廟が建てられて、烏虎大王廟と称された。毎年の春秋に三牲の供え物で祀り、無事を保っていた。すべての役人や百姓たちはこの地を通る時、祭祀をすることはじめて無事に通る事ができた。もし従わない者があれば、皆命を落とされ、聞くものは皆怖がった。

ある日、雍州府の張百万長者に、男の子が授かり、世魁と名付けられ、幼時の名前は五郎といった。彼は科挙の試験に合格した。尚書郭正は魁を月英というお嬢さんの婿にした。数ヶ月もたたないうちに、朝廷は張世魁を山東青州府知府に任命した。張世魁は妻と一緒に家に帰って、父母に別れを告げてから、妻を連れて赴任した。二ヶ月もたたないうちに、青州地方に至った。その地名は嵩山嶺郵亭駅という。当地の年寄りらは彼を迎えて、「ここから前方の嶺の上に、烏虎廟という廟があります。すべてそこを通る者は三牲の供え物で祀れば、無事通る事ができますが、祀りをしないと、恐らく不都合なことになるでしょう。今、旦那様がここにお越しになったので、小人らはこのことを申し上げて、ご判断をお仰ぎします。」と申し上げた。魁は年寄りの言葉を聞いて、翌日の朝に、三牲、お香、ロウソクなどを買ってから、妻月英と一緒に廟に行って、拝んで祀った。ちょうど祈っている時、一筋の黒い気が地下から起こり、たちまち天地が真暗になり、向かい側の人も見えないなどだった。烏虎大王が月英を捉えて洞の中に入ってしまった。

暗雲が去って太陽が現れ、世魁は妻を捜したが見つからず、声を上げて泣き、非常に悲惨な有様だった。ちょうど太白金星が雲の上でその様子を見かけたので、一人の年寄りに変じて地に下り、「大人が夫人を捜したいと思われるなら、閻山に行って正法を修得してこそ、夫人を助けることができますよ。」と、言い終わると見えなくなった。魁は神の導きだと分かったので、赴任せず、従者達と共に家に帰った。彼は泣きながら父母に会って、起こったことを訴え、閻山に行きたいといった。父母の忠告にも従わず、日を選んで父母に別れを告げ出発した。夜宿に着き、朝出発する。沉毛江に至ると、辺りに道もなく、ただ竜と虎が川の中で遊んでいるのを見かけたので、閻山への方向も分からず大声で泣き叫べんだ。すると、川の中から一つの赤い橋が湧いて来るのが見えた。橋の上に立つ人は、頭

に一枚の赤い頭巾を被り、額に一片の水鏡をかけ、手に一本の曲がった竜角を持っている。「我は引表仙師だ。法主の軍令を奉じて、青竜、白虎を退治する為に来た。汝を連れて行く。汝はどんな者か。我の竜角についてきたのか。」と大声で言った。張世魁は聞き終わると、伏して拝む。それから師について閩山洞府に至った。九郎法主は座に着き、引表官の知らせで、魁を中へ召し入れた。魁は拜んでから、起こったことを訴えた。九郎は彼に武芸、正法を伝授した。

数ヶ月もたたないうちに、世魁は修得して、庁堂に上がって申し上げる。九郎は「汝がどうしても行きたいなら、この三枚の霊符を受け取って、身に付けて随時焼き、三歩ごとに一つの肩斗を打ちながら進め。廟の中に至れば、きっと汝の妻を助けることができる。」といった。世魁は拜んで別れを告げる。法主は密かに沙王に命じて、雲の中で彼を助けてやり、火を放って廟を焼き払わせた。

魁は法主に別れを告げてから沉毛江のほとりに来た。自ら考えて「師の言いわけによって俺は三歩ごとに一つの肩斗を打たなければならないが、俺は帰心矢の如し、一歩ごとに一つの肩斗を打って符を催促すれば、もっとよかろう。」と考えを決めるとそう行っただ。思いがけなくも法主のあの三枚の符は、沙王を召すものだった。沙王は雲の上で符に催促されて、先に廟の中に行き、火でその廟を焼き払った。烏虎は抵抗できずに、大敗して逃げた。

月英は烏虎の威嚇にもかかわらず従わなかったもので、洞の後に監禁された。火が延焼してきたため、可哀想に月英は洞の後で焼死した。世魁はここに来て、廟が焼き払われたのを見たが、妻が見えないので、大声で泣きさげんでいた。太白金星は世魁の悲しむ様子を見かけると、真言を唱えて、月英の魂を呼び戻し、法の水を吹きかけて、その元の姿を現させた。彼女は世魁にあって、頭を抱えて大声で泣いた。各々以前の事を話した。そして魁は妻と一緒に閩山に行き、法主に拝謝した。法主は大喜びで、「汝夫婦は家に帰りたいか、それとも護法になりたいか。」と聞いた。「私達夫婦は法主に命を助けて頂くご恩を蒙ったのですから、冥利を考えずいつまでも師に従って護法になりたいと存じます。」と魁は答えた。法主は大喜びで世魁を五郎大将に封じ、月英を救難夫人に封じた。後のことは如何であったか、次の話を聞いてもらいたい。

## (二) 法通は廟を壊す為に捉えられる。(pp. 65-67)

さて、白い蛇母は体を変じからというもの、終日古田県の海中に現れて、人々の船を害した。人々は祈って、一つの廟の工事を始めて、「白蛇聖母廟」と称した。毎年の四季に祀りをして、海中はやっと平静を得るようになった。

烏虎は沙王に廟を焼かれた後に、身の置き所がなくなった。ある日雲の上で古田県にある一つの廟を見かけて、白蛇母廟だと分かった。彼は雲より下りて、手に大刀をもって挑戦した。小妖が蛇母に知らせると、蛇母も完全武装して出陣した。両方とも陣を敷くと、蛇母は「汝は青州にいて、私は福建にいて、各々その宿るところがある。なぜここに来て、私の住まいをかき乱すのか。」といった。烏虎は「俺は理由なくここに来たのではない。俺の廟は沙王に焼き払われてしまった。さらに符呪で俺を押さえつけているので、帰ることができない。だからここに来てお伴したい。」と答えた。蛇母は「古人曰く男と共に耕さず、女と共に織ることをしない。わたしは一婦人で、汝は男子だ。なんで共に宿ることができようか。」といった。烏虎は「古人曰く、男は妻がないと男やもめといい、女は夫がないと女やもめという。今千里の遠くから会いに来た。俺と一緒に新婚の部屋に入って夫婦になり、一緒に富貴を享ける方がよい。何と楽しいことではないか。」といった。白蛇はこの話を聞くなり、ぶんぶん怒って、槍をもって烏虎に向かって刺した。烏虎は刀をもって迎えて戦った。蛇母は力が弱いので、烏虎とは戦わず、洞の中に逃げて、戸をしっかりと閉めて出ようとしなかった。烏虎は洞門をしっかりと塞いで、水も漏らさない様子だった。蛇母はもはや敵を退ける方法がなかった。妖怪達は蛇母が烏虎に譲歩して縁組みするように勧めた。蛇母はやむを得ず門を開いて、烏虎を洞の中へ迎えた。この夜、新婚の夜として祝宴を催して、彼らは夫婦となった。

翌日、夫婦は相談して、「平安を保つ為に、毎年童男、童女で祀りをしなければならない。」と人々に夢知らせをした。村民は聞こうとしなかったが、果たして災いが起こって絶えないので、村民はやむなく従った。張趙二郎にこのことが知れると、法を学ぼうと閩山に入った。三年もたたないうちに、黄三居士は会主の番に当たって祭りをを行う主人となったが、祭りの為の童男童女を得られないで、朝晩泣き入っていた。

話しをもう一方に分ける。さて、羅源县下渡村の陳諫議には、すでに妻の葛氏

婦人があり、子を法通といい、養子を海清といい、娘を靖姑といった。法通は雪山法天聖者に拝謁して師とした。ある日、彼は海清を連れて各所を巡遊して人の苦難を救済したいと、母に別れを告げたところ、母に許された。法通兄弟は出発して、道を進むと、ちょうど一人の老人が泣きながらやって来た。「汝は何事でこんなに悲しく泣いているか。」と法通は聞いた。黄三居士は聞かれると、やむを得ず童男童女を買って廟で祀らなければならないことを話した。法通は「わたしは羅源県の者で、妖氣が至るところで人を害していると聞いたので、家を出て巡遊して人の苦難を救済することにした。あなたの心配事は、必ず妖怪の祟りだ。私は何とかお力になって、この妖怪を退治してさし上げよう。」といった。居士は大喜びし法通兄弟を家に帰ってもてなす。「先生が法を行うのなら、何か必要なものはありまか。」と聞く。法通は、「入用のものは白紙四十五枚、三牲一匹、お茶、果物などで祀りができればけっこうだ。他のものはいらない。」といった。居士はすぐにそれらのものを整えて、法通の言いつけを待った。海清は将を召す文書を書いた。皆十五日辰の時刻に壇に至るように願う。海清は飲んべえで、酔っぱらっていたので、文書の中で皆十四日午の時刻に至るように書いて、この文書を焼いた。海清の酔いが醒めて、期日を書き間違えたのに気がついた時には、すでに文書が焼かれてしまっていた。彼は敢えて兄にはいわずに、黙っていた。このことを誰知ろう。文書が焼かれると、王、搜、劉三人の祖師、すなわち蘭天聖者、飛天聖者、法天師父は願われて壇に至ったものの、祀りの礼がない。各々大いに怒って、三人の祖師は宮に帰っていった。蘭天聖者は疫病を退治する為に江南に行き、飛天聖者は稲の苗を救助する為に陝西にいった。法天聖者だけは法通の師で、法通に三年の災難のおとずれることを知っていた。やむを得ず、雲を止めて、法通が廟を破るのを待った。もし手元が狂うことがあれば、彼の命を助けてやることのできるからだ。

さて、法通は十五日の朝に、髪を振り乱して手に宝剣を持ち、口で真言を唱え、祭壇で法を行って、兵を遣わし、将を召し、ドラや太鼓を一齐に鳴らした。先に海清に命じて、蛇母の廟の中に攻めこませた。蛇母は烏虎と熟睡しているところで、小妖が入ってきて、天兵が廟を攻めていると報告した。二人はびっくりして、空へ逃げ、なんとも手の下しようもなかった。蛇母は、「あなたはそんなに慌てなくてもいい。これは天兵ではない。民間の偽りの法を行うものだ。」といった。烏

虎は、「どうして分かるのか。」と聞くと、蛇母は「その外貌を見ると、天兵に似ているが、彼が雲に乗って追いかけられないのを見れば、彼が天兵でないことが分かる。」と答えた。烏虎は、「それなら、どうしようか。」といった。蛇母は、「天兵は偽物だが、彼は法を行い、策があり、身を隠し、害より遠ざかり、きつと立派な教えを受けた者に違いない。もし、この者を除去したいなら、計略をよくねるより外ない。」といった。烏虎は、「どんな計略で彼を誘うのか。」と聞くと、蛇母は「あなたは余所に隠れなさい。私が一人の普通の女に化けて、廟の中に入って焼香して、その様子を探れば、対策を講ずることができる。」といった。二人は相談してから、蛇母は一人の美貌の女に化けて、廟の中に入って焼香した。海清が手に宝剣を持ち、北方に立って法を行っているのを見た。蛇が化けた女は前へ進んで敬礼をした。海清は、「お嬢さん敬礼をおやめなさい。俺は法を行って妖怪を捉えるのだ。」といった。その女は、「先生はこのように法を行って、どんな星宿によるものなのか。わたしはこのような様子を見て怖い。」といった。海清は蛇母だと知らずに、その女に「お嬢さんは怖がらなくてもいい。俺の兄は雪山法天聖者の弟子で、立派な法を伝授された。俺が剣をもって北方に立っているのは、玄帝に近寄って、足で北斗を踏んでいるためで、妖怪も近寄ることができないのだ。」といった。その女は、「先生はこんな格好をして、私は本当に怖い。先生は剣を下ろして、しばらくお止め下さい。私が焼香して帰った後、法を行ってください。お許し下さいますか。」といった。海清は「お嬢さんがこんなに怖がるので、俺はやむを得ず、しばらく止めよう。お嬢さんは焼香を早く終えなさい。」という、法を解除して座った。

蛇母は、海清が法を止めたのを見るなり、正体を現して、前へ進んで海清を捉えて、雲の上に上がったが、ちょうど法天聖者に遇って大喝された。蛇母は慌てて、対処をするひまがなく、海清を捨てた。海清は帰ってこの事を法通に知らせた。法通は慌てて身を隠すことができず、蛇母に捉えられて洞の中へ入れられてしまった。海清は大いに泣いて、止むをえず黄三居士に別れを告げ、兄の法書を彼の家に預けて、自分は家に帰ってこのことを知らせた。彼のことはどうだろうか、まあ次回をお聞きなさい。

### (三) 靖姑は法通を救助するために法を学ぶ (pp. 69-72)

さて、蛇母は法通を捉えてから、彼を縛って側に跪かせておく。烏虎が「この畜生は憎らしい奴だ。塩と醋を調味料にしてこれを食おう。」と言っているところに、雲の上に現れた法天聖者が大喝して「この二匹の災をもたらす畜生は無礼をしてはいかん。吾れの弟子を傷けないでくれ！」と言う。蛇母は「聖者、吾れら夫婦は彼を災に会わせているのではなく、明らかにあなたの弟子の方がわたしに災を加えたのだ。どうして彼を放すことができようか。」と言った。聖者は「吾れは上聖の法力を持つ者で、どうして汝の手に負えようか。ただ海清が期日を書き間違えて、誤りを犯したので、法通は汝に捉えられたのだ。吾れは汝と同じような考えを持ってはいない。吾れの弟子を放したくないなら、まず吾れ上聖の法力が如何なものか見てみろ。」と言い終えると、口の中で真言を唱えて、西方極楽寺から一つの鐘を遣わしてきた。その直径は八尺、高さは一丈、法通を鐘の下に隠した。蛇母は妖怪の卒に命じてその鐘をとりのけようとしたが、その鐘を持ち上げることができない。蛇母夫婦は鐘を取りのけられないのを見て、相談して、さらに人々に夢知らせをしてぜひ童男童女で祀るように命じた。

さて、海清は黄三居士と別れてから、家に帰って母に会って大いに泣いた。母は「汝は兄と一緒に出かけたのに、なぜ一人で帰って大いに泣いているのか。」と尋ねた。海清は止むを得ず兄が廟を破って捉えられたことを一部始終話した。母親と姉はそれを聞くとおおいに泣いた。靖姑は前へ進んで申し上げるには、「わたしの兄が捉えられた以上、わたしは閩山の門が開いたと聞いたので、法主に拝謁に行って、その法を伝授してもらってから、兄を救助して一緒に帰りたい。」と。母は、「兄弟の情だから、行って助けるのが当たり前だ。しかし汝は女流の輩で、山や川を歩き回ることなどできようか。」と言った。靖姑の決意は固く、行きたがったので、葛氏はやむを得ず海清に荷物を担がせて、靖姑と一緒に出発させた。

靖姑が家を離れて閩山に行くことはさておき、張趙二郎は昔法を学ぶために閩山に行った。九郎洞主は彼に妻がいないことを知って、撒壇という長女の婿にした。彼に正法を教えて、非常に仲もよかった。ある日、二郎は庁堂に上がって洞主に申し上げて「妻を連れて故郷に帰りたい。」といった。洞主がこれを許すと、夫婦は一緒に拝んで別れを告げた。沉毛江に至ると、米を撒く人に出会った。二郎はその妻を喜ばそうとして、破人術を弄して法を試した。妻はこれを見て、そ

の意味が分からず、人をからかっているか自分が楽しみたいのか、夫を悪心の持ち主だと疑いを持ち、夫に「わたしは数日家を離れて、母を思う気持ちがますます切になった。あなたに話して家に帰りたい。」と言った。二郎は彼女の気持ちが分からずに妻を説得して留めようとしたが、妻は従わず、分かれに際して言付けた。「わたしは家伝の三十六の訣法を全部あなたに伝えた。その外符訣もあなたにあげる。もし逢いたいなら、符がつけば、すぐ来る。」と言い終わると、夫婦は大いに泣いて別れた。二郎は途中で靖姑に出会った。何故来たのかと聞くと、靖姑は一々答えた。二郎はお守り一枚を書いて、「吾も閩山に行ってから帰る者で、この一枚のお守りをあげよう。汝がこれを身に付けて行けば、道で犯そうとする邪鬼はない。」と言った。靖姑は拝謝して別れた。

歩いて数里もたたないうちに、さらに一人の婦人が来るのを見た。互いに会うと、靖姑は来たわけを聞いた。その婦人は、「わたしは郡武府光沢県清梁橋の端に住んでいる李富の娘李三娘だ。母がお産で亡くなった。母に報いる方法はないかと思い、閩山に行って法を学んで、母を済度し、人を助けたいと思う。」と言った。彼女が靖姑のやって来たわけを聞くと、靖姑も一々答えた。二人は大喜びで一緒に行った。

翌日、さらにこちらに来る一人の女に出会った。靖姑らは彼女に出会って、やはりその来たわけを聞いた。彼女は、「わたしは泉州府海澄県林家荘の林九娘だ。父母一家の七人が疫病で死んだため、閩山に行って法を学んで、父母を済度し、疫病を退治したい。」と答えた。二人はこれを聞くと大喜びし、さらにそれぞれの事を話して、皆喜んだ。数里も歩かないうちに、夕陽は西へ落ち、農夫や木こりが家に帰っていった。靖姑は宿を探すように海清に命じて、万花舗に入って宿した。この夜に相談して姉妹の契りを結ぶことになり、同時に生まれた年月日を言った。李三娘は十七歳、七月十五日子の時刻に生まれ、靖姑は十七歳、正月十五日寅の時刻に生まれ、林九娘は十六歳、八月十五日辰の時刻に生まれた。年月を論ずると、靖姑は年上で、李三娘はその次、林九娘は三番目である。一同天地を拝んで誓いを立てた。

翌日の朝、宿代を払って出発した。姉妹三人は連れ立って行き、数日も経たないうちに、沉毛江に着いて、前に道がなくなった。躊躇しているところで、向かいの岸を歩いてくる一人のお婆さんが見えた。三人は彼女を見ると、川を隔てて



敬礼をして、「わたしたちは法を学ぶために閭山に行きたいが、ここまで来ると道がなくなり、川に舟もない。お婆さんにお伺いしたい。ここに普段舟はあるのですか。」と聞いた。お婆さんは、「今まで舟などなかった。汝らがこの川を渡りたいなら、わたしが穿いている靴を川の上において、川の岸へ流す。汝三人は靴の中に入れば、座ったまま渡ることができる」と言うと、靴を川の中へ投げ込んだ。その靴が飄々とやって来て、靖姑三人は岸に着いた靴を見た。それは頗る大きく、人が入ることができる。三人は争って靴に入ろうとして一斉に川の中に落ちた。海清は岸で三人が川の中に沈んだのを見たが、彼女たちが閭山に行った事を知らなかった。しばらくして彼女たちが上がってこないで、海清は川に向かって泣いて、家に帰って母に知らせた。

さて、向かいの岸にいたお婆さんははたして閭山張大夫人だった。法主は靖姑たちが法を学びに来ることを知って、先に張大夫人に彼女たちを連れて山に入るように言い付けた。その日に、夫人は三人が川に入ったのを見ると、法を行って閭山へ連れて行った。三人はお婆さんに会うと、「わたしたち三人は川に落ちてしまったが、どうしてここでまた逢えたのか。」と聞いた。お婆さんは笑って、「わたしは普通の夫人ではなく、実は閭山の張大夫人だ。法主の命令によりここに来て汝たちを洞の中へ迎えたのだ。」と言った。数里も歩かないうちに、二匹の虎が吠えてくるのが見えた。三人は皆驚いた。「これは閭山の宗門を守る猛虎二郎だ。汝らは驚かないで、前へ進んでいい。」とお婆さんは言った。三人がさらに進んでいくと、手に竜角を持っている一人の老人がこちらに来るのが見えた。靖姑たちは彼に拝んで敬礼した。老人は「吾れは引表仙師だ。法主の命令によりご案内しよう。」と言うと、道案内をして行った。閭山の一の門に至って、さらに二匹の黄色い斑の虎が守っていた。仙師は虎を退けた。二の門まで行くと、麒麟、獅子が守っていた。仙師はさらにそれを退けた。第三の門まで行くと、九郎法主が序堂に上がった。仙師と張大夫人は入ってこれまでのことを申し上げた。召された三人の娘は法主に拝謁して各々その事情を申し上げた。九郎は、「吾れの法は複数の者に伝授することはできない。どうして三人連れ立って来たのか。一緒に法を学びたいなら吾れは伝授しない。」と言った。三人は聞いてびっくりして、泣きながら、「敢えて連れ立って法主に拝謁するのではない。道で偶然に逢って、各々そのわけがある。法主は惻隱のお心で、弱い者を助け、困っている者を救うよう

にお願い申し上げる。」と言った。法主は「それなら、吾れのこの法門では、男が法を学ぶなら、男が授け、女が法を学ぶなら、女が授ける。」と言った。張大夫人にその法を授けるように言い付けた。張大夫人は命令により三人を後宮へ連れて行き、各々に足や髪を洗わせてから、馬を走らせる武芸や雷に乗って法を行う本領を教えた。

張大夫人は靖姑の前身が観音の爪だったことを知って、その法を尽く彼女に伝えたいと考えたが、はたして彼女が学ぶことができるかと心配した。ある日、李、林の二人の娘は菜を摘みに園へ行かせた。背中痛みを装って、悲鳴を上げながら、法を一つのできものに凝縮させた。靖姑は急いで入って何うと、張夫人は「背中が急に痛み出して、一つのできものができた。とても苦しい。」と言った。靖姑は、「法主に申し上げて、医者を呼んできては如何ですか。」と言った。夫人は「激しい痛みで、どうして医者を待つことができようか。」と言った。靖姑が「どうしましょうか。」と言うと、夫人は「誰かが手でその膿の先を取ってから、その膿を口で吸い尽くせばよくなるだろう。」と言った。靖姑は聞くと止むを得ずに手で膿の先を取り、口でそのできものの膿を吸った。できものの中の膿が流れ続けて来て、靖姑はこれを吐くひまがなく、是非なくそれを一口一口吞でしまった。そのできものはたちまち消えた。夫人は起きて、「汝がいなかったら、吾れの命は終りになってしまっただろう。まあ汝の吸った膿はどこに吐いたのか。」と聞くと、靖姑は「できものの膿は奥様の血で、取えてそれを吐かずに、全部飲んでしまいました。」と答えた。「吾れは汝に知らせてやろう。それは膿ではなく、法である。」と聞き、靖姑は「どういうことですか。」と問うた。夫人は「汝は前に来なさい。吾れは一々説明してやろう。汝は心を尽くして教えをよく受けなければならない。」といった。靖姑は命令に従って地面に跪いた。夫人が手に一善の清水を持ち、口で真言を唱えながら、水を靖姑の口に注ぐと、靖姑の心は酔った如くになった。醒めてから閻山の法の教えがはっきり分かるようになった。そして立ち上がって拝謝した。

李、林の二人が菜を摘んで家に帰えると、張夫人は彼女たちを跪づかせて前に進ませた。李三娘には胎児を保ち分娩を催促する法を教え、林九娘には四季の疫病を退治する法を教えた。春の蜘蛛の精は張元伯と言い、夏の黄犬の精は劉元達と言い、秋の蛙の精は鐘士貴と言い、冬の野毒の精は趙公明と言う。三人の娘は

拝謝して退く。それから、一人の老人に出会い、前へ進んで敬礼をすると、靖姑は聞いた。「師長はどんな方ですか。何か教えて下さるのか。」と。その人は、「吾れは福州紙銭嶺の者だ。姓は連、名前は公と言う。汝が同郷の人だと分かって、わざわざ汝に話しに来た。明日法主に拝謁して、閩山の軍馬を出してもらい、法の宝で助けてもらってこそ、汝の兄を助けることができるのだ。」と言った。靖姑は拝謝して別れを告げた。後の事を知りたいなら、次回で説明する。